

11

ミドルセクス病院・医学校の軌跡

柳澤 波香

青山学院大学・津田塾大学非常勤講師

ミドルセクス病院 (The Middlesex Hospital) は1745年、ロンドンのソーホー地区およびセント・ジャイルズ地区の疾病貧民の救済を目的として、事業家ルバヤノーサンバーランド伯爵など20名の篤志家の発意により設立された。創設時はウインドミル・ストリートに賃借した二棟の建物から成り、病床数は18であった。

ミドルセクス病院は18世紀前半ロンドンに設立された五番目のヴォランティア・ホスピタルであったが、この病院には二つの大きな特徴があった。ひとつは、設立の翌年(1746年)から病院内では医学講習が行なわれ、医学校の原形が形成されたことである。当初より症例が集中していた同病院は臨床医学教育の格好の現場であった。また、ミドルセクス病院は一般病院であったが、ウィリアム・ハンターらの協力を得て、イングランド初の産科病棟を他に先駆けて設置した。

患者数の増大に伴い、1757年、創設地に近いモーティマー・ストリートに新病院が建てられた。産科病棟は一般病棟とは異なる棟に設置された。18世紀後半、病院では増築が行なわれたが、他のヴォランティア・ホスピタルと同様にミドルセクス病院も運営資金を寄付金に依存していたため、財政基盤は必ずしも安定的ではなく、寄付金収入の減少や出納係の横領などにより、18世紀末に病院は財政困難に陥った。しかしながら、病院支援活動に熱心であった作曲家ヘンデルがミドルセクス病院のためにチャリティーコンサートを開催し、収益の全てを病院に寄付し、窮状を救った。

19世紀前半、ミドルセクス病院および医学校には、チャールズ・ベルが加わり、彼の下へ多くの医学生が集った。病院、医学校の発展は共に続いたが、1834年、ロンドン大学ユニバーシティ・コレッジ医学校が至近距離に設立され、両医学校の間には激しいライバル関係が生じた。新興のユニバーシティ・コレッジ医学校がいち早く導入した麻酔術をミドルセクス医学校が取り入れたのは20数年後のことであった。

医学校教育の先駆的存在として19世紀半ば以降、ミドルセクスでは医学教育をさらに進展させた。臨床教育の拡充のために外来を拡張し、博物館、図書館を充実させた。外国語(ドイツ語、フランス語)の習得を導入し、優秀な学生を表彰する一方、学生生活の規律を強化した。古典学にも精通した医学校校長の内科医ケイリーは、ヴェルギリウスの叙事詩からカルタゴの女王ディドーの言葉を引用し、医学校のモットーを「悩み苦しむ者の救済を学ぶ」と定め、以後これは病院のモットーにもなった。

20世紀初頭前後には医療技術の進歩を反映し、放射線学校、理学療法学校が併設され、さらに病理学研究所、癌研究部門が設置された。創設以来ミドルセクスには高名な医師が在籍したが、英国病理学の発展に貢献し、外科学会会長を務めたブランド＝サトンもそのひとりであり、親友の作家キプリングと共に物心両面にわたってこの時期の医学校の発展に寄与した。

第二次大戦後、National Health Service (以下NHS) の施行(1948年)により、ミドルセクス病院は他のヴォランティア・ホスピタルと同様にNHS傘下に入った。さらに20世紀後半に行なわれた度重なる医療行政制度改革とロンドン大学の各医学校の再編成により、ミドルセクス医学校は年来のライバルであるユニバーシティ・コレッジ医学校に統合され、ミドルセクス病院も2005年に廃院となった。病院の壮麗な建物は取り壊されてしまったが、ミドルセクスの名を冠した医学講演会が定期的で開催され、現在のユニバーシティ・コレッジ医学校の紋章にはミドルセクス医学校の紋章が組み入れられ、260年にわたる病院の歴史をここに留めている。